

「もうすぐ絶滅するという紙の書物について」

ウンベルト・エーコ、ジャン＝クロード・カリエール(著)、工藤妙子(訳)

阪急コミュニケーションズ 2010年12月30日刊

本書は、コーディネーターであるジャン＝フィリップ・ド・トナックが「我々が文化と呼んでいるものは、じつは選抜とふるい落としからなる長いプロセスを経てもたらされたもの」という認識の下に、歴史を経てわれわれの元にたどり着いた書物について、このトピックを語り合うのに最適な2人のヨーロッパ人、イタリアの哲学者にして小説家であるエーコとフランスの脚本家にして文筆家であるカリエール、に縦横無尽に語り合ってもらった対談集である。

この2人は、広く読まれている本の著者であると同時に、あるいはそれ以上に、読書人であり古書収集家である。その彼らは、書物について語りながら、実は人間とそれが織りなす社会について語っている。さらに言えば、人間の愚かさや偏執についてじつに愛着をもって語っている。本当にムダな読書をしてきた人だけが到達できる境地とも言える。

それはエーコの次の発言に反映されている。「(人間の)知的で崇高な美德と低俗な愚行を合わせて評価すれば中ぐらいの点数になります」「死ぬときが近づいてくると、愚かしさが美德を凌駕するんだと考えるようになります」

本書のすばらしさは、珍説愚説の礼賛、読まれなかった本、忘れ去られた作者たちへのオマージュとして一級のエンターテインメントになっていることだろう。本書の隠れたメッセージは、書物を役に立つかどうかだけで判断し、拾い読みで知ったかぶりをするような読書では、人間の本質は理解できないということであろう。

また、古代から現代に至るまで、残ってきた書物が必ずしもすべて古典と見なされるわけではなく、読めば地獄に落ちると判断されてきた禁断の非公開書もある。現代まで残ってきた本もこのように相対的に見れば、少しは違った接し方ができるだろうし、歴史の審判さえも常に正しいとは限らないことが明らかにされている。

そして、現代技術の持っている便利さと不便さを天秤にかけたうえで、2人がたどりついたのは、時代を超えて残るのは、デジタル化された本ではなく、紙に印刷された書物であるという確信である。